opusdei.org

神のいつくしみの秘跡:ゆるしの秘跡に ついて(XIII) 愛を 深める

フランシスコ・ルナ著(新田 壮一郎訳) 『神のいつくしみ の秘跡:ゆるしの秘跡につい て』より

2024/11/18

これまでの記事を読む

愛を深める

神との親しさとは、神を侮辱しない。だと思っている人がいな見れな、否定ところれないない。方ので、それなの症を考えるところがいます。内でいきにものはます。内であるとなります。となりますであります。となる神を毎びなどあります。とになるのです。

聖性という仕事において、堅忍して 戦い続ける力を得ることができるの です。毎日出遭う障害は限りなくあ り、それに打ち勝ってキリストに似 た者となるには、度々ゆるしの秘跡 を受けて、天の助けを得ることが必 要になります。

スペインなどで昔からよく使われる たとえ話が、この秘跡にぴったり当 てはまります。きこりが一人いまし た。彼は一頭の口バを飼っており、 ロバの働きで日用の糧を得ていまし た。冬になると、村を出て、森に行 き、木を切って小さな束を作りま す。束がいくつかできると、ロバの 背にのせて山を下ります。夏には朝 早く起き出して、清水の湧く山の泉 に行き、水がめを口バの背に積ん で、帰ってきます。しかしある日、 その木こりは、「このロバの食い分 を少し減らせば、もっと儲かるので はないかしと、考えます。利己的な 考えでしたが、大志を抱いた上は実

行に移さなければなりません。そこ で、水曜日には、ロバに食べ物を与 えないことに決めたのです。ロバが ねぐらに戻ってみると、いつものエ サが見あたりません。一週間が経ち ました。別に変わったことも起らな かったので、週に二度断食させよう と決めます。二週目も無事に過ぎま した。ロバは倒れもせずに働き続け ています。第五週目になると、週に 五回の断食となりました。そして、 第六週目が始まった朝、可哀そうな ロバはとうとう死んでしまいまし た。木こりが困りきって叫んだの は、その時です。「残念だ。やっと 慣れてきたというのに | 。

わたしたちもこの話の主人公と同じ ことを繰り返します。今日はゆるし の秘跡を受ける気がしない、ゆるし の秘跡を受ける機会がなかった、次 の機会にしよう。このように、いつ も何らかの理由が見つかるのです。 ひとつ確かなことは、こんな状態が 続けば、神の恩恵を失うか、微温 (生温さ) に陥ってしまうというこ とです。原因はどこにあるのでしょ うか。それはゆるしの秘跡に対する 愛の不足であって、そのために度々 秘跡に近づくことができなくなるの です。ゆるしの秘跡にはどの程度の 頻度であずかればいいのかについ て、規則を決めるのは難しいことで す。ある人は二週間毎で充分でしょ う。他の人は毎週の方が良いかも知 れません。いずれにしろ、それぞれ 状況が違うわけですから、司祭に相 談するのが最良のやり方でしょう。

司祭はわたしたち一人ひとりの状況 を考えて、勧めを与えてくれるはく です。教会の掟によると、少といか も年に一度罪の告白をするこッと もっています。また、カト険に で習ったように、死の危険は、な 理でと で聖体を拝領する時は、れて良 しの秘跡を受けるよう勧められ ます。しかし、この掟はあまりく 理解されていないようです。皆が 知っていることは、大罪のある時に は、告白の義務があるということで しょう。ということは、大罪がなけ れば聖体拝領の前にも、死の危険に 瀕しても、年に一度のゆるしの秘跡 も義務ではないということになりま す。ここで考えなければならないこ とは、義務になっているのは最低限 度であるということです。教会の教 えによると、「すべての信者は、分 別の年齢に至った後、少なくとも年 に一回、忠実に告白する義務があ る」(『カトリック教会のカテキズ ム』1457)、また「いずれにしても 聖体を拝領する前に、犯した大罪を 告白する義務があります」(『カト リック教会のカテキズム 要約(コン ペンディウム) 』305) 。しかし、 主に対する愛を少しずつでも増して いきたいと思えば、当然何度もゆる しの秘跡を受けるのが望ましいので す。愛する人に手紙を書くとか、毎 日食事をするとか、外出する時、身

づくろいをするとかは、義務でも何でもありません。しかし、誰でも立派に実行しているではありませんか。

「神は、わたしたちの不忠実にうん ざりなさることはありません。子供 が神のもとに立ち返りさえすれば、 痛悔して赦しをお願いしさえすれ ば、どのような侮辱でも、神はお赦 しになるのでする。わたしたちの主 なる神は、真の父ですから、わたし たちの赦されたいという望みを予見 してご自分のほうから先に恩恵を与 え、わたしたちを受け入れてくださ います(聖ホセマリア・エスクリ バー「神の子の改心」、説教集『知 識の香』に収録)。だからこそ、毎 週、二週間毎、一ヶ月毎にゆるしの 秘跡を受けるよう強く勧められてい るのです。

時には、惰性に陥らないようにと考 えて、必要以上にゆるしの秘跡にあ

ずかる間隔をあける人がいます。信 仰心なしにゆるしの秘跡にあずかる ことに慣れてしまわないようにと、 考えているのでしょう。しかし、惰 性に陥らないように注意すること と、ゆるしの秘跡の回数を少なくす ることとは、同じではないはずで す。月に二度、三度、四度とゆるし の秘跡に近づくから慣れてしまうの ではなく、必要な準備をしないから 惰性になるのだということを考えな ければなりません。一年に一度しか ゆるしの秘跡にあずからない人が惰 性に陥っていることも往々にしてあ るのです。

度々ゆるしの秘跡を受けることが望ましいのは確かです。霊的生活と神の愛に進歩しようと思えば、頻繁に告白することが不可欠の条件となります。そのために、決った司祭に告白するのは賢明なやり方です。わたしたちの状態をよく知り、困難を克服する助けとなってくれ、理解して

くれると同時に、物事をはっきりと 言ってくれる司祭を探して、いつも その司祭に告白するのは望ましいこ とです。包み隠さず正直に告白して いれば、悪が善であると思うような 誤りを犯さないように、内的生活を 正しく導いてもらうことができま す。

先に述べたような条件を備えた司祭であれば、わたしたちが活動と名づけがちな怠惰について、わたしたちが愛と呼びがちな官能の働きについて、隣人愛と呼ぶが実は自己愛でちいて、正義と呼びがことが往々にして妬みにすぎないことなどについて、はっきりと理解させてくれるはずです。

度々ゆるしの秘跡にあずかる人は、 小さな過失をたくさん並べたてるか わりに、そのような無数の小さな過 失の底にある原因となるものを探す 必要があることを思い出すべきで しょう。大罪は正直にはっきりと告ってはいません。しません。しません。しません。しません。りません。りません。に話したとあってからとなっているではないのの必要ないのがいがのの必要ながいかがでもといってないがいかがでもといってないがいがでもといってない。これはいるではないのではないのであるというです。というではないのではないのでもといってはないのでもというできない。

良い準備をすれば、ゆるしの秘跡は短くてすむはずです。また、田さまた、てまた、でする場合も、前もえるではが、短時間ではは、大切なことはず、はなったといったが、は、これの後で、自己を願ったりするのががいる。と、ゆるしの秘跡がいと、ゆるしの秘跡がいたず

らに長引かせ、司祭だけでなく、秘 跡にあずかる他の人々にも、時間の 無駄使いを強いることになるからで す。わたしたちがしっかりした準備 をしていないので告白の時間を長引 かせると、長く待たされた人たち が、最初に、「長く待たされたので 苛々しました」、と言うことになる でしょう。このようなことは避けた いものです。とは言っても、急いだ り慌てたりする必要はありません。 必要なだけ時間をかけて告白すれば 良いのです。このゆるしの秘跡とい う、教会におけるキリストとの出会 いのために大切なことは、ふさわし い準備なのです。(完)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/itsukushimi-no-hiseki13/(2025/12/11)